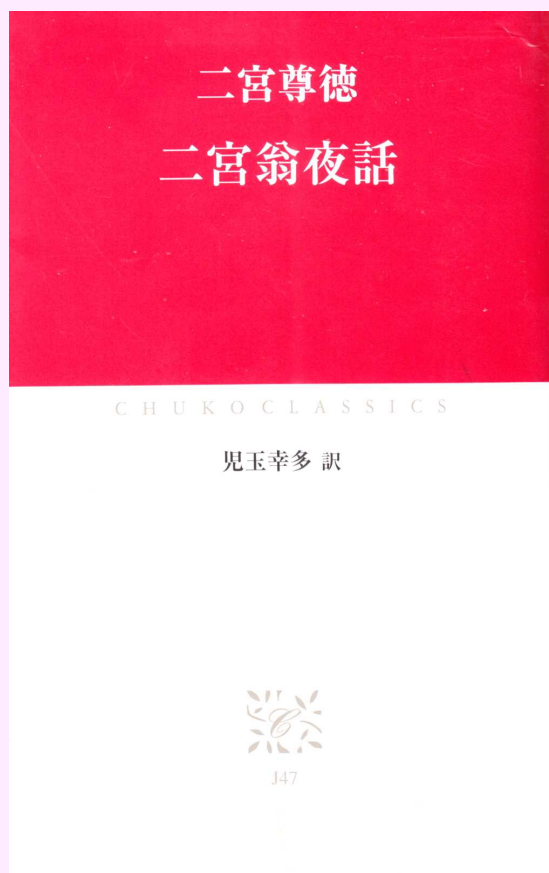


名誉顧問のコモンセンス

二律背反 表裏論 9

道歌か、古語か？

その1—道歌篇



その1 道歌篇

道歌と古語 報徳先生は、農民相手に、色々なお話をなさいます。それも、分かり易く、また、覚え易く、諭すように語ります。それを聞きに、時には、農民だけではなく、他の村の里親や役人たちや門人たちや帰依者たちも聞きに来ます。いつも、門人たちだけで五、六十名に登りました。人気です。その講座の記録も、『二宮翁夜話』にたくさん残っています。話の要領は、人生で生きていく上での問題を取り上げて、それを、道徳的な立場から遇するように諭すのです。お話のまとめてとして、**自作の道歌と古い古典** の名言でオチをつけます。どれも、身近な話題として話し、興味ある言葉でまとめるのですから、本を読んだこともない、お坊さんや賢者たちの話を聞いたことのない無学の村人や多忙な町の人でも興味を持って聞きます。それで、人気です。特に、特色は、最後に自作の「道歌」

をわざわざ加えることです。なぜ、道歌を加えるかと言えば、自分の訓誡を一人でも多く覚えて欲しいからです。和歌や俳句が、五七五や五七五七七と定型になっているのは、だれでもが、作ったり覚えたりするためです。定型なら、作りやすくて覚えやすいからです。

それでは、報徳先生の教訓を道歌と古語と共に考えたり覚えたりしましょう。先ず、道歌」から、始めましょう。それには、『二宮翁夜話』を使います。

1 道歌 数首 【『二宮翁夜話』第百十六話:110頁】

翁は、五つの歌を紹介してい、こう言われた —

1 咲けば散り 散ればまた咲き 年ごとに 詠(なが)めつきせぬ 花々の色

「困窮に陥ってどうすることもできず、持っている物を売り出す者があれば、それを安い物だと喜んで買う人があり、また不運がきわまって、仕方がなく家を売って裏店へ引っ込む人があれば、表店へ出てめでたいと喜ぶ者がたえずある世の中である」。

毎年、咲いては散る花のように、良いときもあれば、悪いときもあり、幸せな人もいれば、不幸な人もいる — 「世の中とはそういったものだ」。これが、先生の教えなのです。「そう思って、あきらめよ」というのでしょうか？ それでは、あまりにも殺風景過ぎます。

2-A 増減は 器(うつわ)傾く水と見よ こちらに増(ま)せば あちらへるなり

「物価の騰貴に大利を得る者もあれば大損の者もある。損をして悲しむ者があれば利を得て喜ぶ者がある。苦楽・存亡・栄辱・得失、こちらが増すとあちらが減るということだ。みなこれは、自他を見ることができない半人足の寄り合い仕事だからである」。

これも、前の歌と同じで、人間それぞれに、「苦楽・存亡・栄辱・得失」があり、「人生は、自他を見ることができない半人足の寄り合い仕事なのだ」というのです。それで、「苦楽・存亡・栄辱・得失」に余りこだわるな — ということなのではないでしょうか。大きなお盆に水を入れて、平に持ちつづけることはなかなか難しいように、実は、この「苦楽・存亡・栄辱・得失」の判断は半人足の凡人には難しいことなのです。それで、別の箇所で、水入り盆の仕組みについて詳しく説明します。

2-B 天つ日の 恵み積み置く無尽蔵 鍬で掘り出せ 鎌で刈り取れ

「増減の論」について、翁は、また、こう言われた —

「世の中には、とかく増減のことについてさわがしいことが多いが、世上で増減というものは、たとえば水を入れた器が、あちら側、こちら側に傾くようなものだ。あちらが増せばこちらが減り、こちらが増せばあちらが減るだけで、水には増減がない。あちらで田地を買って喜べば、こちらには田地を売って欺く者がある。ただ、あちらとこちらの違いだけで、本来の増減はない。私の歌に、**増減は器傾く水と見よ** といっているとお

りである。私の道で尊ぶ増減はそれとは異なって、ただちに天地が万物を生育するのを助ける大道で、米五合でも、麦一升でも、芋一株でも、天つ神の積んでおかれた無尽蔵（むじんぞう）から、鍬（くわ）・鎌（かま）の鍵をもって、この世の中に取り出す大道である。これを「本来の増減のない水を入れた器の道とは違って」**真の増殖の道** という。尊ぶべきであり、勤めるべきである。**天の日の恵み積み置く無尽蔵 鍬で掘り出せ 鎌で刈り取れ**。【『二宮翁夜話』第百十七話・111頁】

でも、「**2 こちらに増せばあちらへるなり**」については、つづいて、次のように説明しています。

三段論法 すなわち、ここで重要なのは「お盆の水」の話ではないということです。「お盆の上の水は一定で、お盆が傾くことによって増減が決まる。だが、その傾きとは、農作物の収穫高によって崩れる。従って、富の絶対的な増減は鍬と鎌を使った日々の労作にかかっている」といって、実は、この「労作の重要性」を語るための三段論法だったのです。それで、道歌をもう一つ加えます。こちらの方が、お盆の歌よりも大事なのです。この「鍬で掘り出せ 鎌でかりとれ」という歌は、まるそれこそお盆はお盆でも、盆踊りのお囃子のように景気の良い言葉です。各地の盆踊りも、村落共同体においては貴重な団結維持の催しです。こういった勢いのある言葉の使用にも報徳先生は気を使っています。まさに、「道歌」の真髄です。

先生のお話は、次に、富の増減のことから、「食事と着る物」の話に移ります。

3 食えばへり 減ればまた食い いそがしや 永き保ちのあらぬこの身ぞ

「屋根は銅板（あかがねいた）でふき、蔵は石で築くことはできようが、三度の飯を一度に食っておくことはできず、やがて寒がくるからとて、着物を先に着ておくということもできない人の身である。したがって、長くは生きられないのが天命である」。

食と衣料についての話なのですが、どちらが十分であっても、人間、長くは生きられないということです。これもまた、なにが言いたいのか、なんだかよく分かりません。

4 我という その大元（おおもと）を尋ねれば 食うと着るとの二つなりけり

「人間世界のことは、政事も教法も、みなこの二つの安全を計るためだけのことで、その他は枝葉であり、潤色にすぎない」。

これはまた、愛想も素っ気もない言い方です。本当に、人間、着て食べているだけのものなのでしょうか？ 散々、日頃、「仁」とか「報徳」とかいう、世間での人間性を云々してきた割には、ぶっきら棒な言い方をするものです。これも、勿体ぶった道学者や神主の道を神道という神主たちを嫌ってのことなのでしょう。自らが、銜学者（げんがくしゃ：学問・知識のあることを自慢し見せびらかす学者）的な言い方をした時には、こういった極端なことを言っておまかすのも先生らしい下世話なところですが、でも、あまり良い癖ではありません。

5 腹くちく 食うてつきひく女子（おなご）らは 仏にまさる悟りなりけり

「つきひく」の意味がよくわかりません。先生の解説には、「食事をすませると、すぐに明日食うべき物をこしらえる」となっているので、「続いて引き継ぐ」のか、「突き・引く」という連続技なのでしょう。どちらにしても、良い意味で、食べることは人生にとって必要な事柄なのでしょう。特に、「女性」を、「仏さまよりも偉い」と急に持ち出して誉めたのは、返って、女性をからかっているようで感心しません。単に、聴き手に受けるために、当時の女性蔑視の風潮に乗っていただけなのでしょうが。まあ、ここは大目に見ましょう。

「自分の腹に食物が満ちれば寝ているのは、犬猫をはじめ心なきものの常の情である。それを、食事をすませると、すぐに明日食うべき物をこしらえるのは、未来の明日の大切なことをよく悟るからだ。この悟りこそ人道になくてはならない悟りである。この理をよく悟れば、人間はそれで事足りるであろう。これは私の教えであり、悟道の極意である。悟道者などという者の悟りは、悟っても悟らなくても、知っても知らなくても、ともに害もなければ益もない」。

この説明も、なんだかよく分かりません。食べることが、どうして「未来の明日の大切なこと」なのでしょう。ここで先生は、「悟りなどはいらない。悟道者などは害も益もない。人間、喰って寝ればそれで良い」と簡単に切り捨てています。真剣に、近郊一番の悟道者である先生のお説教を聞きに来た真面目な人たちは、この言葉に満足するのでしょうか？ これもいつも先生のやり方です。肩透かしです。一種の照れです。でも、これでは満足できませんね。

6 飯と汁 木綿着物ぞ身を助く その余はわれを せむるのみなり

翁はこう言われた — 「衣服は寒さをしのぎ、食物は飢えをしのぐだけでたりるもので、そのほかはみな無用のことだ。官服は貴賤を分かつ目印で、男女の服はただ装飾のためで、婦女子の紅白粉と異なることがない。紅白粉がなくても婦人であれば結婚にはさしつかえない。飢えをしのぐための食物と寒さをしのぐための衣服は、智者と愚者、賢者と不肖者を分かつ、学者でも無学者でも、悟っても迷っても離れることはできないものだ。**これを備える道こそ、人道の大元、政道の本根**である。私の歌に、**飯と汁 木綿着物ぞ身を助く その余はわれを せむるのみなり**と詠んでいる。これが私の道の悟りの門である。よくよく徹底すべきだ。私は若いころから、食物は飢えをしのぎ、衣服は寒さをしのげばたりるとしてきた。ただこの覚悟一つで今日まできた。私の道を修行し実行しようと思うものは、まず、この原理を悟るべきだ」。

【『二宮翁夜話』第百二十五話・百十七頁】

これも、大変な覚悟です。「食と衣だけあれば、あとのものはなにもいらない」というのです。住む家も、名誉も、地位も、お金も、いらないというのです。ただ、食と衣だけ用意してあれば、それで人間、生きていけるのですから、「人道の大元・政道の本根」と悟ることです。でも、この二つを常に不自由なく暮らすのは、実は大変なことなのです。特に、家族があればなおさらです。

着ることも大元か まあ、食べることは大切です。食べないと飢饉の時のように餓えて死んでしまいます。でも、食べることに加えて、「**人間の大元を尋ねれば 食うと着るとの二つ**」というのは、いささか変に思われます。着ることも、人間の「大元」(おおもと)なのでしょう。先生は、別の箇所、神道者をからかった川柳「**神道者 身にぼろ～を纏(まと)い居り**」を紹介しています。身なりの劣る神学者を悪く言います。「今の世の神

道者が貧困に苦しんでいるのはこのとおりで、これは「神道者自らが」真の神道を知らないからだ」というのです。「神道は豊葦原を瑞穂の国とし漂(ただよ)える国を安国と固め成す道である。こういう大道を知るものが決して貧窮に陥るわけではない。貧窮に陥るのは神道がどういうものであるかを知らない証拠である。嘆かわしいことではないか」と真の神道について語ります。【『二宮翁夜話』第百七十二話・百五十九頁】 この「神道は開闢の大道である」については、このあとで、また、お話しします。

2 占い師の看板 【『二宮翁夜話』第七十三話・七十五頁】

翁は、占い師の看板に日と月とを描いてあるのを見てこう言われた — 「彼が看板に日月を描いたのと、仏寺で金箔の仏像を安置するのとは同じ思いつきだが、仏寺はきわめて巧みであり、占い師は非常に稚拙である。日は丸く赤く、三日月は細く白い。それをそのままに描いたのは、正直ではあるが、おろかでもあれば拙劣でもあるから、尊さが無い。ところが僧侶はこれを人体に写し、もっとも人の尊ぶ黄金の光をかりて尊さを示している。仏氏の工夫の巧妙なことは、占い師などの遠く及ぶところではない」。

過度な装い このお話も、着ているもの、すなわち「装い」に関することがらです。占い師も仏寺のどちらも、本体の「尊さ」を示したいのですが、そのやり方は違っていました。ここで、占い師と仏寺では、どこがどう違ったのでしょうか？ その答えは、はっきりしません。でも、「正直だけではいけない」というのです。誠を述べる仏氏にあっても、時には過度な「装い」があっていいというのです。なるほど、世の中、少々の「ウソ」も必要なのだということは分かります。これも、報徳先生のいう「変通の容認と不知の心得」です。先生は、「世の中、『仁の心』だけではいけません。『智恵』も働かせて相手にあたりなさい。『不仁の心』を知る『不知の心得』も必要です」といいます。また、「人に対する時には諦めてはいけません。騙された振りをして時期を待つ『変通の容認』も必要です」というのです。これが「報徳仕法」です。「二律背反表裏論：1 天道か、人道か？」(8頁)をご覧ください。そこでは、「一度は、あきらめた振りをする」 — これが、「変通」です。愚人や悪人相手にして、待てないのは智恵がないからだ。これを、「不智」と言う。決して、怒ってはいけません。相手を幸せにするのが本来ですから……。一知半解な人間共にとっては、ここまで言わないと真意が伝わらないと、あくまでも先生は誠実です。

結局、この五つの歌による「歌数首」(『二宮翁夜話』第百十六話)は、どれも、報徳先生のお説教の核心を突くものではありませんでした。

3 世は術の上下のみ 【『二宮翁夜話』第百五十九話・百四十八頁】

勤と儉と譲 最後には、先生も悟ったことを言います。

翁はこう言われた — 「一般に、貧富だ苦楽だと言いさわぐが、世間は大海のごときものだから仕方がない。ただ泳ぐ術が上手か下手かの違いだ。舟を使うのに役立つ水も、溺死する水もかわりはない。ときにより、風に順風もあれば逆風もあり、海が荒い時もあるれば穏やかなときもあるだけだ。だから、溺死をまぬかれるのは泳ぎの術一つだ。**世の海を穏やかに渡る術は、勤と儉と譲の三つ だけだ**」

「世の中を生きるのに大事なものは、勤と儉(儉約)と譲の三つだけだ」 — これは極めて現実的な「実用主義的」(プラグマティック: pragmatic)な考え方です。でも、世間を順調に渡る泳ぎ方としては、勤労も儉約も謙譲も、また、それぞれ、実際に当たっては難しいものです。従って、成功者もいれば、失敗者もいるわけです。

4 書物は氷の如し

心の温気 先生は、最初に、とても大切な「世の中の大道：勤と儉と譲」について語りたいのですが、これも、日頃、あまり本を読んだことのない農民やお役人にでもよく分かるように説明しようとしています。先生は、直接、話題について核心を語るのではなく、まず、その語る前提の「読書」についてから話を始めます。「物事の本質を語るときには、胸の中の温気(うんき・暖かみ)が必要なのだ」とまず、聞く者たちの「読書」の心得から始めます。これは、道を説く道者としては、珍しいことです。でも、とても大切な「心得」です。

7 古道(ふるみち)に つもる木の葉をかきわけて 天(あま)照らす神の 足跡(そくせき)を見ん

翁はこう言われた — 「大道は、たとえば水の如くで、よく世の中を潤(うる)して滞(とど)かないものだ。それほど尊い大道も、字に書いて書物にするときは、世の中を潤すことなく、世の中の用に立つこともない。たとえば水の氷ったようだ」。

心の温気 先生は、とても大切な「世の中の大道」について語るのですが、これも、日頃、あまり本を読んだことのない農民やお役人にでもよく分かるように、まず、その語る前提から話を始めます。先生は、直接、話題について核心を語るのではなく、「本を読むこと」から始めます。「本を読んで、大道という物事の本質を知るときには、胸の中の温気(うんき・暖かみ)が必要なのだ」とまず、読書の心構えから始めます。これほど聴き手に親切なのは、珍しいほどです。まず、「なにかを知ろうとして、直接、本をそのまま読んでも役にたたない」といいます。「なぜなら、色々な知恵や解決法が書かれた本は、水ではなくて氷なのだからだ」といいます。喉の渴いた者には、氷は吞めません。意見を必要とする者には、ただ、本をそのまま読むだけでは役に立たないというのです。その時に必要なモノはなんでしょうか？ これから先生が話そうとすることは、「日々の生活での行いのことなのだ。書物を読んで、そこから学ぶことではない。その心替えについてなのだ。毎日、実際に行っていることに照らし合わせて本を読み、そしてそれを実行に移すべきなのだ」といいます。本で述べられている内容は、氷となった文字で複雑な文章となって書かれています。その分かり難い文章である氷を溶かして、実際の問題に置き換えて、本人が吞める水にして飲ませようというのです。凍った氷を溶かすには、熱が必要だ。その熱とは、読む人の心の熱だといえます。

「氷は、もと水であることに相違はないが、少しも潤さず、水の用をなさない。書物の注釈というものは、また氷に氷柱が下ったごとく、氷の解けてまた氷柱となったのと同じで、世の中を潤さず、水の用をなさないことはやはり同じだ。さて、この氷となった経書を世の中の用に立てるには、胸の中の温気(うんき・暖かみ)をもってよく解かしてもとの水として用いなければ世の潤いにならず、実に無益のものだ。氷を解かすべき温気が胸中になくて、氷のままで用いて水の用をなすと思うのは愚かの至りだ。世の中に、神・儒・仏の学者があつて世の中の用に立たないのはこのためだ。よく考えるべきだ。それゆえ、わが教えは実行を尊ぶ。経文といい、経書といい、その経というのは、もと機(はた)の堅糸(たていと)のことだ。されば堅糸ばかりでは用をなさぬ。横に **日々の実行を織りこんで初めて役に立つ** ものだ。横に実行を織らず、ただ堅糸ばかりでは益のないことは、説くまでもないことだ」。

実学のすゝめ これこそ、「実学」の教えです。本に書かれた内容を、「日々の農作業や生活の場面に当てはめて、考えよ」というのです。本に書かれているのは、応用問題です。

それを、「実際の作業に当てはめて考えよ」と先生はいいます。諭吉翁が『学問のすゝめ』で言うところの「人間(の)普通(の)日用に近き実学」なのです。報徳先生の諭しは、すべて、「実学のすゝめ」です。その時に必要なのは、農作業の苦しさや難しさです。日々の作業の中で、色々な問題や課題が出てきます。それを、「日々の実作業に即して、本から答を探し、それで解決しようと思え」というのです。「本には、問題や課題を解決する色々なヒントがある」というのです。「それが分かるのは、実際に農作業をしている農夫本人だけなのだ」というのです。

このことが言えるのは、これまでに、先生が如何に農民に「天下の大道」について悟らせようとしても、なかなかうまくいかなかった経験があるからです。その苦勞を語る文章があります。漢学者に語らせ、心学者に教えさせ、お坊さんに諭させても上手く行きませんでした。【『報徳記』42頁】

先生・度量潤大(かつだい)にして比の民を安んじ之を教るの道、尽くさざる所無し。曾(か)つて、漢学者を招き聖經を講ぜしめ又心学者をして之を教示せしめ、僧侶をして因果應報の理を諭さしむ。而して補う所あらず。是に於て乎(や)、天を怨みず、人を咎めず、惟、一身誠意の足らざるを責むる而已。一身の責むる至る所、遂にその身を死地に置いて以て一心の不動を試みんとす。天地にも誓言す可く、鬼神をも祈る可し。亦、何ぞ、独り仏を避けるの隘心(あいしん:狭い心)あらんや。是、[先生の]至誠の然からしむる所にして素より常人の為(な)す能わざる所なり。

このように先生は、命を賭してまで、農民を教えることに腐心しました。でも、すべて失敗しました。それで、自己の成功体験とそれから得た自己の手法を分かり易く語ることにしたのです。それが、すなわち、「胸の中の温気」です。問題を解こうとする熱意と努力と思考力です。

5 神道は開国の道 【『二宮翁夜話』第六十三話・六十五頁】

翁はこう言われた — 「神道は開闢の大道であり、皇国の本源の道である。[神が]豊葦原(とよあしはら)をこのような [いまの素晴らしい日本である] 瑞穂(みずほ)の国・平和な国と治められた大道である。この開国の道は、すなわち真の神道である。わが神道が盛んに行なわれてから後に儒教も仏教も入ってきたのだ。わが神道開闢(かいびやく)の道がまだ盛んにならない前に儒仏の道が入ってくる道理はない。わが神道、すなわち開闢の大道がまず行なわれ、十分に事足りるようになってから、世上にむづかしいことも生じ、そのときになって初めて儒も入用、仏も入用となったのだ。これはまことに疑いもない道理だ」。

なるほど、「大道」は先ず最初は神道からなので、儒学や仏教の教えは、直接、関係がないといえます。学問的には、そうばかりとは言えないのですが、これが報徳先生の持論です。

「たとえば、まだ嫁のないときに夫婦喧嘩があるわけがない。まだ子が幼少なのに親子喧嘩があるはずはない。嫁があつてのちに夫婦喧嘩があり、子が成長してのちに親子喧嘩があるのだ。このときになって初めて五倫・五常も悟道・治心(道を悟り、心を治める)も入用となるのだ。それを、世人はこの道理にくらくて、治国・治心の道をもって本源の道とする。これは大きな誤りだ。本源の道は開闢の道であることは明らかだ」。

儒教の五倫・五常 なるほど、日本の国は、元々、喧嘩のない、善人ばかりの平和な国であった。その頃には、儒学や仏教や神道の教えはなかった。いまそれらの教えが盛んな

のは、日本の元である「本源の道」を忘れて、欲張った人間が増えて悪くなり、五倫・五常が必要になったからだ。ここで先生のいう「五倫」とは、儒教の人の常によるべき五つの真理のことで、「君臣の義・父子の親・夫婦の別・長幼の序・朋友の信」のことです。また、「五常」とは、これも儒教での人の守るべき五つの恒常不変の真理のことで、「仁・義・礼・智(ち)・信」であり、また、「父・母・兄・弟・子のそれぞれ守るべき義・慈・友・恭・孝」のことでもあります。こういった、五倫・五常などのあからさまな誇示は、元々の日本人には必要なかったのです。そのことを知って貰うために、先生は、自作の「道歌」を披露します。

「私はこの迷いをさまさせるために **古道に つもる木の葉をかきわけて 天照らす神の足跡(そくせき)を見ん** と詠んだ。よく味わってもらいたい。大御神(おおみかみ)の足跡(あしあと)のあるところがすなわち神道である。世に神道とっているのは神主の道で神の道ではない。はなはだしきに至っては、巫祝(ふしゅく:神事を司る者)の輩が神礼をくばって朱銭を乞うのを神道者というようになった。神道というものは、どうしてこのように卑しいものであろうか。よく考えて見よ」。

「神道」といっても、神札を配る神主たちが言う神道のことはありません。お札を配ってお金を稼ぐ神道者への先生のこの不満は、免罪符を買わせて神の道を説くのを非難したマルチン・ルターが行った西洋の宗教改革を思い出させます。「儒者や神道者たちの言動は、大道の上に積もる落ち葉にすぎない」といいます。散々な言い方です。独学の先生ですが、自分で得た信念に絶対的な信頼を寄せています。先生は、元々、実証主義者で、自分で考えて、実践したことしか信じません。人に騙されるのが嫌いです。また、人を騙す人も嫌いです。信念のない周りの道学者や神道者は、みんな嫌いです。この落ち葉を掻き分ける歌にも、多分に先生の大きな怒りが感じられます。無智で善良な農民や役人たちは、大勢、彼らに騙されて、お金を盗(と)られていることでしょう。人を騙すことは、もっとも「仁：他人を大事にすること」に反するのですから卑しいものの代表とされました。

6 神の道 X 神主の道

綾部(あやべ)の城主九鬼(くき)侯が、御所蔵の神道の書物十巻を、「これを見よ」と言って翁におくられた。翁はひまがなかったので、[実は内容に不満があったので]二年間も封を解かれなかったが、ある日翁は少し病気であった。私(福住正兄:『二宮翁夜話』の作者)にこの書物を開かせ、[神道の本の間違いを私に教えるために]病床でお読ませになった。

翁はこう言われた — 「この書にあることは、みな神に仕える者の道で、神の道ではない。こういう書物が万巻あっても国家の用には立たない。いったい神道というものは、国家のため今日では用がないものだろうか。『中庸』にも、「道は須臾(しゅゆ:しばらく)も離るべからず、離るべきは道にあらず」(道は少しの間も離れることのできないものである。もし離れることができるものならば、それは道というべきものではない)と言っている。世間で道を説いている書籍は、多くはこの類である。この類の書があっても益はなく、なくても損はない。私の歌に、**古道(ふるみち)に つもる木の葉をかきわけて 天照らす神の 足跡を見ん** と詠んだ」。

「『古道』とは皇国固有の大道をいう。『つもる木の葉』とは儒仏をはじめ諸子百家の書籍の多いことをいう。皇国固有の大道は、いま現に存在するが、儒仏・諸子百家の書籍の木の葉におおわれて見えないから、これを見るためには、この木の葉のごとき書籍をかきあげて、大御神の足跡がどこにあるかとたずねなければ真の神道は見ることはできないのだ。おまえたちが落ち積もった木の葉に目をつけるのは大きな間違いだ。落ち積もった木の葉をかきわけ捨てて大道を得ることに勤めなさい。さもなければ、真の大道は決して得ることはできないのだ。」

【『二宮翁夜話』第六十四話六十六頁】

結局、報徳先生は、とうとう、城主さまから下賜された神道の本は読みませんでした。

では、「大道」を知るには、なにを讀んで、なにを、どう学べばいいのでしょうか？ 「神道の本は読むな」と言うだけで、先生の答えは、「世の中の大道、すなわち、勤と儉と讓だ」につきまします。したがって、この三原則「勤・儉・讓」を詳しく知るには、先生の言語録の『報徳記』と『二宮翁夜話』を全部読んで、自ら学ぶしかありません。結局は、そうするより他はなさそうです。

7 開闢元始の大道 [『二宮翁夜話』第百三十四話・百二十七頁]

ある篇に「開闢(かいびゃく)元始の大道」が説かれています。ご紹介しておきましょう。

翁はこう言われた — 「さてこの地(小田原藩の桜町)に来て、いかにしようかと熟考するに、わが国開闢の昔は、外国より資本を借りて開いたのではない、わが国はわが国の恩恵で開いたに相違ないことに気がついてから、本藩(小田原藩)の下付金を謝絶し、近郷の財産家に借金を頼まず、この四千石の地の外は海外と見なし、自分が神代の昔に豊葦原へ天から降り立たと決心をし、皇国は皇国の恩恵で開く道こそ、天照大神の足跡だと思い定めて、一途に **開闢元始の大道** によって努力したのである」。

ここで先生のいう「開闢元始の大道」が明らかになります。

「開闢の昔、豊葦原に一人 天から降り立たと覚悟するときは、流水に潔身をしたように、潔(いさぎよ)いこと限りがない。何事をするにも、この覚悟をきめれば、依頼心もなく、卑怯・卑劣の心もなく、何を見ても羨ましいことなく、心の中が清浄であるから、願うことは成就しないことがなくなるのだ。この覚悟が事をなす根本であり、私の悟道の極意である。この覚悟が定まれば、衰村を起こすのも、廃家を復興するのも、いとやすういことだ。ただこの覚悟一つだ」。

なんともまあ、この未開の日本国に、たった一人で降り立ったつもりで、独立・独歩、必死の覚悟で生きていこうというのが「開闢元始の大道」なのです。先生は、藩や財産家たちのだれからも援助を受けず、村人たちのだれからも助けてもらわず、ただ、命じられたままに困窮した衰村の復旧を試みます。さぞ、心細く、孤独だったことでしょう。藩の役人たちの「怨望」や農民たちの冷たい仕打ちにも先生は耐えたのです。この難題に一人挑む若者に対する思いやりのなさが、当時の役人や村人たちの心根だったので、それが結局、先生が、終生、「仁：他人を先に考える」に心を打たれるきっかけになったのです。

また、両手を振って真ん中を闊歩する「天下の大道」ではなく、小さなことにも、この先生の言う「大道」の片鱗が見えます。二つ、ご紹介しておきましょう。いずれも、日本国の開闢以来、人民が守ってきた信条です。また、「至誠と実行」の話がつづきます。

8 至誠実行－1 [『二宮翁夜話』第百三十九話・百三十二頁]

翁はこう言われた — 「我が道は至誠と実行のみだ。それゆえ、鳥獸・虫魚・草木にもみな適用することができる。まして、人においてはなおさらだ。だから、才智・弁舌を尊ばない。才智・弁舌は人には説くことができるが、鳥獸・草木に説くことはできない。鳥獸は心があるから、あるいは欺くことができるかも知れないが草木を欺くことはできない。**わが道は至誠と実行** とであるから、米麦・蔬菜(そさい)・瓜・茄子でも、蘭・菊

でも、みな繁栄させるのである。たとえ知謀は孔明を欺き、弁舌が蘇秦や張儀を欺くといっても、弁舌を振って草木を栄えさせることはできないであろう。それゆえ、才智・弁舌を尊ばず、至誠と実行とを尊ぶのだ。古語(『中庸』)に「至誠神のごとし」(至誠の人は鬼神のようなものである)といっているが、至誠はすなわち神といってもさしつかえないはずだ。およそ世の中は、智のある者も学のある者も、至誠と実行とがなければ、事は成就しないことを知るべきだ。

このように、報徳先生は、この世に於いて、なによりも「至誠と実行」が重要なことを強調します。特に、「実行」については、農作物や花や木について格段の知識と養生に長(た)けている先生なら、このように自信をもって言えるのでしょうが、元々、孔明や蘇秦や張儀ではない、普通の農民やお役人や学者ではこうはいきません。先ずは、「志」(こころざし)として聞いておきましょう。まず、「実行」からです。

至誠実行－２ 蠅を集める方 [『二宮翁夜話』第百四十話:百三十三頁]

翁はこう言われた — 「朝夕に善を思うといっても、善事をしなければ善人ということができないのは、昼夜に悪を思っても悪事をしなければ悪人といえないのと同じである。それゆえ人たるものは、悟道・治心の修行などに暇を費やすよりは、小さな善事であっても身に行なうほうが尊い。**善心がおきたならば、すぐに事業にあらわすべきだ。**親のある者は親を敬養するがよい。子弟のある者は子弟を教育すべきだ。飢えた人を見て哀れと思ったらすぐに食事を与えるがよい。悪いことをした、自分が間違っていたと心づいても、改めなければ意味がない。飢えた人を見て哀れと思っても、食を与えなければ功がない。だから **わが道は実地・実行を尊ぶ** のだ。世の中のことは、**実行しなければ事は完成しない** ものなのだ」。

「たとえば菜虫は小さいから求めようとしても得られないが、菜を作れば求めなくても自然に発生する。子子(ぼうふう)は小さくて探しても得られないが、桶に水を溜めておけば自然に生ずる。いまこの席に蠅を集めようとしても決して集まらない。捕えてきて放しても、みな飛び去る。しかし、飯粒を置けば集めなくても集まるものだ。よくよくこの道理をわきまえて **実地実行を励むべき** だ」。

「譲」へと話が戻る 先生は、菜虫やボウフラやハイを集めることも教えてくれました。「なにごとにも、実行するには、頭を使え」というのです。「菜虫やボウフラやハイの立場に立って考えろ」というのです。はい、わかりました。「相手の立場に立つ」 — これが、「仁」でした。こうして集まった菜虫やボウフラやハイは、実は、普段の農民や役人や親や子弟や飢えた人たちのことなのです。そのためには、「飯粒」(お金)がいるのです。それで、お金をひねり出す「譲」(じょう:ゆずる)へと話は戻ります。

翁は言われた — 「よいだろう。しかし譲りの道は人道だ。人と生まれた者に、譲りの道がなければならぬのは言うまでもないが、人により家により、老幼の多い家、病人のある家、厄介者のある家もあるから、家ごとに法を立てて、きびしく行なえといっても行なわれるものではない。ただ富者によく教え、有志者によく勧めて行なわせるがよい。そして、この道を勤める者には富貴・栄誉がついて来る。この道を勤めない者からは富貴・栄誉がすべて去る。少し行なえば少しついて来る。大いに行なえば大いにつく。私の言うことは必ず間違いではない。世の富者によく教えたいのはこの譲道だ。ひとり富者だけではない。また金穀だけでもない。道も譲らなければならない。田の畔(あぜ)も譲らなければならない。言もゆずらなければならない。功も譲らなければならない。みなよく勤めなさい。

【『二宮翁夜話』第七十九話:八十二頁】

「譲」が大切なのは、譲ることは他人のためにもなり、自分のためにもなることです。報徳先生は良い指針をみつけました。それで、真剣に「譲」を説きます。

9 譲 論 【『二宮翁夜話』第百七十七話・百六十二頁】

翁はこう言われた — 「どこの国も、開闢の初めから人類がいたということはない。幾千年を経て初めて人が住み、そして人道が生じた。禽獣は欲しい物を見れば、すぐにとって食う。取れるだけの物は遠慮なく取って、譲るということを知らない。木もまた同じだ。根の張れるだけは、どこまでも根を張っていく。これは、彼らが自然に行なう方法である。人がもしこうならば、それは盗賊だ。人はそういうものではなく、米が欲しければ田を作って取り、豆腐が欲しければ銭をやって取る。禽獣がすぐ取るのとは違う」。

「いったい、人道は天道とは異なるもので、譲道から成り立つものだ。譲とは、今年の物を来年に譲り、親は子のために譲ることから成り立つ道である。天道には譲道はない。人道は人の便宜を計って立てたものだから、ややもすると奪おうとする心が生ずるのだ。鳥獣はまちがっても譲心の生ずることはない。これが人畜の違いである」。

先生は、「天も鳥獣にも譲心はない。譲心があるのは人間だけだ」といいます。しかし、人間の譲心は、他人のための譲る心も含むので、ややもすると衰えることもある。

「田畑は一年耕さなければ荒地となる。荒地は百年たっても、自然に田畑になることがないのと同じである。人道は自然のものではなく、作為のものであるから、人が用に立てているものは、作ったものでないものはない。それゆえ、人道は作ることを勧めるのを善とし、破ることを悪とする。万事自然にまかせておけば、みな廃れる。これを廃れないように勧めるのを人道というのだ」。

従って、報徳先生は、「人間は、絶えず譲心を持ちつづけなければならない」といいます。

「人の用いる衣服の類、家屋に用いる四角な柱・薄い板の類、そのほか白米・搗(つ)き麦・味噌・醤油の類は、自然に田畑・山林に生育するものではない。そこで人道は、勤めて作ることを尊び、自然にまかせて廃れるのをにくむ。虎や豹はもちろんのこと、熊や猪のごときは木を倒し根を掘ってしまい、強いことはいくまでもない。その労もまた言葉では言いつくせない。しかも終身労して安堵の地を得ることができないのは、譲ることを知らないで、生涯自分のためにつくすだけだから、苦労しても功労がないのだ。たとえ人であっても、譲の道を知らないで、勤めなければ、安堵の地を得ないのは禽獣と同じだ」。

「そこで人間たる者は、智慧はなくても、力は弱くても、今年の物を来年に譲り、子孫に譲り、他人に譲る道を知って、よく実行したならば、その功労は必ず成就しよう。その上にまた、恩に報いる心がけがある。これも知らなくてはならず、勤めなくてはならない道だ」。

自らの「譲道」のその上にある「恩に報いる心」とは、藩に報い、国に報いることです。話も、スケールも大きくなります。一見、大言壮語に見えますが、報徳先生は、それもやっけてのけます。日光神領の荒廃地の復興など、この国を動かすこのような雄大な事業は、他の人にはとてもできません。ここに報徳先生の特異な偉大さがあります。先生は、常に実行の人であり、他人を尊ぶ「仁の人」です。

【2025/07/17 都築正道】

